

## 図書館・医療・行政の連携についての研究 ー長崎市立図書館の事例をもとにー

岡部 達美

本研究では、図書館が医療・行政機関と連携して、その地域特有の課題に取り組んでいる、平成23年に始まった長崎市立図書館の「がん情報サービス」を取り上げる。がん情報サービスは、「がん情報コーナー」の設置、ブックリスト作成、「図書館でがんを学ぼう講座」、「図書館 de サロン」の開設など、様々な取り組みから成る。

本研究の目的は、上記サービスの全貌を明らかにしたうえで、現在抱える問題点を把握し、その解決策を考察すること。また、この取り組みに対する、図書館・医療・行政自身による評価、さらには、その意義を考えたうえで筆者の評価を述べること。そして、最終的に、この取り組みが、他の機関で展開できるかどうか、その可能性を模索することである。

研究方法としては、平成27年3月より10月にかけて、5回にわたり実施した、半構造化インタビュー調査と9月・10月に実施した参与観察を用いた。それは、アンケート調査などの量的な調査方法だけでは明らかにすることのできない、利用者やサービス提供者が実際に感じている問題点や想いを、その人たちの言葉で捉えられると考えたからである。

調査の結果、行政・医療・図書館の3者連携では、利用者の利便性が高まっていることや、それぞれの機関にとって、広報面での弱点を補える利点があった。一方、この取り組みでは、各機関に課題があることがわかった。図書館では、司書の負担があった。病院では、「お出かけ隊」の主体性や活動内容に問題があった。そして、行政では、図書館との連携は取れていても、医療との関係は弱かった。したがって、図書館・医療・行政の3者間で、意識に違いがあり、弱い連携となっていた。しかし、これら3者の連携事業は、今後、市民のニーズの高まりが考えられ、「成功途上」の取り組みであると位置づけられた。

なお、この3者連携それ自体、図書館による新たな取り組みであるが、2014年より、全国の図書館に先駆けて、「図書館 de サロン」で、がん関係者だけではなく、広く関心のある市民を対象に、従来の、図書館司書が、がんについて情報を提供するという一方向の支援ではなく、がん患者や家族、そして、関心のある人に、「語らせる」という方法、いわば、参加者から話を引き出す方法は、今までの図書館司書の姿勢に全くなかった、支援の方法であった。この新たなアプローチの方法が、本研究の対象である、新たなサービスの軸としての図書館を接着剤とする行政・医療機関との連携という形態とは別に、新たな形での3者の連携へと発展する可能性を強く感じるものであった。

最後に、今後、このような長崎市立図書館の取り組みを、他の地域の図書館や機関で展開できる可能性があるか検討したが、その可能性が十分あることが考察できた。この取り組みは、今後も発展していくと考えられる。

(指導教員 照山絢子)